



揺さぶる

見方 歩

バイクを大きく揺さぶる。ブレーキを強く握りしめ、テレスコピックを大きく沈みこませ反動で前後に揺する。400ccぐらいの大きさなら前後左右と効率よく動かせるのだが、1リットルクラスともなればそうはいかない。装備された重量は300kgに迫る。

「チッ、ガス欠かよ」

思えば十代の頃は、タンクの底の鉄板が見えるまで、よく走ったものでガス欠になる事などは、ざらにあったものだ。その度、バイクを大きく揺さぶりタンクの造形に合わせて溜まったガソリンをキャブレターに送る。そんな事を三〜四回すると、10kmやそこらは走る事が出来た。それでもその範囲にスタンドが無い時は、押して歩いた。暗い夜道をずっと押して歩いた事もあり、他人が見れば泥棒に見えた事だろう。

空っ欠になったタンクを覗き、わずかに音のする底を見る。

「あと数キロくらい、行けねえかな」

鼻につく揮発臭に、過去の記憶が頭の中を巡った。車体の重さに効率よく揺する事が出来ず、半分やけくそでセルを押すが、空回りする音にただ消耗してゆくのを感じ手を離す。無駄だと分かっているけど、少し間隔を置いてもう一度押してみる。セルの音が止み、しばらく眺めてみるが、息を吹き返す気配も無く、無情にも赤いインジケータランプが今の気持ちに反して灯っている。

「まったく、余計なもんゴチャゴチャ付いてやがるから、ガソリンが行かねえんだ。負圧コックにインジェクション、点火マップにアクセル開度センサー。一昔前のバイクなら、タンク外して逆さ吊りにすりゃガソリンをキャブに送れたのによ、まったく予備タンもねえし」

その巨体はカバーに覆われ、こんな道端でバラすなんて面倒くさくてやる気が起きない。一人で文句を言ってみても、苛立ちをぶつけるところも無く、自分をなだめるように力を抜く。

まだタンクの底で音のするガソリンを恨めしそうに見て、コックを閉める。しかたねえか、半ば諦め地図を見る。

「さっき通って来た町にはスタンドが無かったから、ん〜と、ここか、この辺まで行かねえと無いのか」

携帯電話もあるし、通り過ぎる車もいる。その気になれば助けを求める事も出来たが、そんな安心からか選択肢に考えなかった。

よし行くか、と気合を入れて、次の町まで約10km。途中に登り坂もある。なんで押す気になったのか、よく分からないが、押して歩こうと決めた。

五分も押すと、体中から汗が噴き出す。まだ五月だと言うのに、道路脇にある表示盤は気温

26℃を示している。標高にして、1000m弱程だろうか。山間の道路から見上げれば、樹木越しに頂の白い山並みが見える。

今日は天気良かった。本当に久しぶりに走りに出た。長距離を走る事には慣れていたが、久しく行

っていない。天気の良いさに誘われるままに、ふらりと走り出した。標高を稼ぐように山間の国道に分け入ると、肌に感じる空気が過去の時間を思い出させ、導かれるように、当ての無い先へと引き寄せられる。出発してから四時間が経っていて、丁度昼になろうとしていた。途中幾つかの店があったが、目に映るばかりで止まろうとは思わず、なんとなくスルーしてここまで来てしまった。

去年の秋に入れたガソリンが、今何リットル残っていたのか、曖昧な残量を勝手に決めて走り出したのだ。しかし思った以上に距離は伸びず、バイクは火を失った。何時もならもっと手前で給油しているはずだが、今日は何となく何故だろう、行く当ても無かったから、目的が無かったから走る事を止めなかった。

ガス欠になる事が分からなかった訳では無く、一時間くらい前から気にはかけていた。でもなぜか何処にも立ち寄らず、止まるまで走ってしまった。

服を脱ぎ、気を取り直して押し歩き始める。重い、走っている時は何一つ思う事のない重さが、体中の筋肉にのしかかる。一頻り歩いた頃、一台のバイクに声をかけられた。

「どうしました」

どう答えようかと迷っているところへ、愛想の良い顔が話しかける。

「ガス欠ですか」

困ってはいたが、今の状況になるまで放っておいた自分が、人様の親切によって助けられるのは虫がよすぎると思い、素直に声が出ない。

「いえ、押しているんです。何処まで行けるか、やってみようと思ひまして」

何の解決を求めての答えなのか、対峙する顔に不可解な曇りを感じたが、笑みを見せ汗を拭いた。変わった人だと思っただろう。じゃあ、頑張ってください、と言ひ残こされた声に、親切を無にした自己嫌悪を感じたが、解決できていない心に触れられなかった安心感を感じ、走り去る姿を眺めた。

三

登り坂だ。一分も進まないうちに息が切れる。この坂を押して登るのは非常に骨だ。下手をすると、日が暮れるかもしれない。思いが浮かぶと、タンクを開け、恨めしそうに音のするガソリンを睨みつける。今さらながらセルを押すと、一瞬エンジンが息を吹き返した。

正直喜んだ。つい声をあげて口元が緩む。今のうちに止まらないうちにと思い、ヘルメットも被らず飛び乗った。500mくらい走っただろうか。息も絶え絶えにエンジンは息を引き取った。

僅かな希望だったが、坂の半ばで潰えた。見返した坂は、歩けばかなりの距離だが、あまり進んだような気はしなかった。スタンドをかけしばらく休んだ。今、さっきのライダーが来たら、助けを求めるのだろうか。また断って押すのだろうか。思いを巡らし、今来た道を振り返る。そこへ、一台のバイクが近づいてくる気配がして、首をもたげると、まだ遠いが排気音で分かった

。激しくアクセルを開け閉めしているのが山間に響き、かなり飛ばしているのが音のけたたましさで分かる。姿が見えた。距離にして300mくらい、相当飛ばしている。彼？の目に自分がどう映ったかは分からないが、減速する事も無く、横を走り抜けていくと、風が後から追いかけてきた

。

ただ無心で走り去る姿を目で追う。ぱっとブレーキランプが点いたと思った次の瞬間、スッと傾き消えていった。そして音も消え去った。

「ふーん、ドカッティか」

過ぎたバイクの事を思いながら、さて行くかと自分に気合を入れ直す。頭の中で、重さの計算が始まる。装備した重量からガソリンの分を引くのだ。それでも260kgは有にあるだろう。しかも登り坂だ。さっき走り去ったバイクのスピードが恋しい。本当なら、もう一時間も前にこの場所を走り去っていただろう。体が熱い。こっちがオーバーヒートしそうだ。

よくゆっくり走ると周りの景色が見えるとか言われるが、歩くより遅いスピードで、カタツムリのように這っている自分には、周りの景色なんか全く目に入らなかった。

息が切れる。一分押す度に休む。さっき止まった所は振り返るとすぐそこだ。この坂を越えるのに、どれくらい時間がかかるのだろうか。息が切れ、頭の血管に滾る血潮を感じる。四肢に力を込めるために、一瞬息を止め押し出す。体が火を噴き、燃え上がっているように感じるが、押ししても押ししても一向に進まない。

「くそっ、なんでこんなに重いんだ」

押す以外はする事が無く、頭では色々な事が交差する。手前でガソリンを入れておけばよかったとか、分かっていたはずなのにとか、果てにはもっと軽いバイクにしておけばよかったとまで思い、こいつ余計な物付き過ぎているんだと、思いは巡る。

「ちっくしょー、こんな物外してやろうか」

出来もしないのだが、付いている部品に八つ当たりする。ただでさえ重いのに、幅が広くて押しにくい。体が斜めになり、力が余計に要る。それでも自分で招いた状況を受け入れるようにして、ひたすら押し歩く。

四

どれくらい進んだのか。時計は休まず進んでいるのに。頭は思考能力も、時間の感覚も失いかけていた。一台の車が横に並んで、声をかけてきた。

「ガス欠かい」

その言葉の質は、助けて欲しいなら助けてやるぞ、そう聞こえた。息が切れて、すぐに話す事が出来なかったから、返事はわざと遅らせた。切れる息の中で、本心はもう楽になりたかったはずだ。どの道、最後は携帯で誰かを呼ぶかもしれないと思っていたから。僅かな時間の間に、頭の野郎が思いついた答えは、

「いえ、競争しているんです。この先の町まで何分で行けるか、押して行ったらどのくらいかかるのかを」

全くのでたらめを言ってしまった。つくづく負けず嫌いの自分にため息が出る。車の男はサングラスをかけなおし、走り去って行った。声をかけてくれる人は親切だ、ひよっとしたら今の人

も過去にバイクでガス欠を経験して言うのかもしれない。脳裏に浮かんだものは、まったくそ重いのを堪えて歩くうちに薄れていった。

今のバイクに乗っている人達は、ガス欠を経験した事があるのだろうか。素朴な疑問が出てきて、まだろくに金を稼ぐ事も出来なかったガキの頃を思い起こした。初めてバイクを手に入れた頃はとにかく乗りたかった。走れるならどこでもよかった。もちろん金なんて、そんなに持ち合わせてはいない。タンクを満タンに満たすなんて、まず無かった。スタンドへ行っても、200円300円そんな単位でガソリンを入れ、何時もガス欠寸前で走っていると、習慣で後どれくらい距離を走れるのか、勘で分かるようになる。タンクを揺らして聞こえる音を聞き別け、そんなやり方でも慣れると結構当てになった。

五

押し歩く、息が切れる、休む、この三工程を幾度も繰り返し、歩き続ける。頭は、重い、まだか、この二つを繰り返す。ようやくの事で坂の終盤に差し掛かろうと言う時に、遠くからバイクの音がした。前か、後ろかと思いながら、人の事なんかどうでもよく、別に当てにはしていなかった。自分は己の殻の中で精一杯の辛さを感じていた。

音が近い、後ろだ、後ろから来る。程よいペースで、かつスムーズに駆け抜ける。同じ道路の上にも、座標が変わる事も無く、離れていく。視界から消え去ると、後ろ姿の幻影に、俺は何故押しているんだと、どうしようもない怒りにも似た感情が湧き上がり、アスファルトに叩きつけた。

三十分ほどして、ようやく坂の上まで来た。町までの道のりの三分の一にしか過ぎなかった。しかし町まで後一步の達成感があった。アスファルトに座り込み、脈が落ち着くまで休んだ。

何分経っただろうか、汗は引き、傾き始めた陽に辺りは気温を下げ始めた。この辺なら夜には一桁くらいの気温になるだろう。今はまだ20℃くらいはあるのだろうか。昼の温かかった日差しはもう失われていた。

時計を見ると、三時を過ぎている。押し始めてから三時間、平地ならもう街に着いていただろう。単なる失敗談で済んだであろうに。

汗が引いて涼しくなったところで、再び歩き始める。登り坂では無いが、下りでも無い。当たり前の重さが、当たり前のように体にかかる。さっきまでは登り坂が憎かったが、今はこいつの重さが憎い。さっきに比べれば、随分と楽なはずなのだが、今の状況に慣れるとこいつの重さが恨めしい。時計を見ながら町までの時間を予測する。今の調子なら、一時間あれば行けそうだ。スタンドが何処にあるのかは、昔の記憶でうろ覚えだが、立ち寄った記憶があった。

後四十五分、時計と喋り続ける。押して歩くことはもう単なる作業になっていた。後何分、自分が今の状況から解放されるまでを淡々と数える。ようやく町が見えた。町と言うより、集落だ。山間の国道にポツリポツリとある集落。信号が一つ、学校が一つ、何でも売っているよろず屋が一件。そして確かこの辺りと見渡す。どうもある気がしない。200mくらい行ったところで、嘗てスタンドだった場所に着く。過去の遺跡を見つけた感触に、今日の苦勞が砕け散った。

近所の人でもないかと見てみるが、人気は感じられなかった。とりあえずの目的地にへたり込んで、地図を広げた。この先はまた山間地となり、登りが続くだろう。しかもその先の町までは15kmいや20kmはあるだろう。今来た道程よりも長い、来た道を引き返すのは今更に思われた。

携帯を開いて、アンテナのマークが出ている事を確認したが、この期に及んでもまだ電話する気にはなれなかった。何故だかは分からないが、こうしようと思う結論が見いだせないまま、どうする訳でもなくただ時間が過ぎた。ふと時間を見ると、もう五時を回っていた。後一時間もすれば、日が暮れてしまうだろう。

六

動かずにいると、腹が減ってきた。とりあえずさっきあった店に入り、何か食べるものを適当に見繕う。一言も喋らない老人がお金を受け取った。

また地図を広げて眺めていたら、この先2 km程の所にキャンプ場を見つけた。暮れかかる空に急かされるように、この地へと向かった。歩き始めてまた登り坂だ。また押す、息が切れる、休むの三工程を繰り返しながら、その地へ着いた頃は、もう薄暗くなっていた。ようやくパーキングらしい所まで来て、スタンドをかける。とにかくバイクと離れて楽になりたかった。キャンプ場と言っても、夏場にしか営業はしていないようで、今は誰もいない。暗くなる中見渡すと、管理棟とその先にバーベキュー用の施設が幾つかと、柵の向こうにはバンガロー風の建物が点在して見える。入り口にある自動販売機が、辺りが暗くなる中ポツンと寂しさを醸し出している。

屋根しかないベンチに座り、一息つく。さっき買ってきたパンをかじりながら、辺りを見渡すと音が吸い込まれるほどに静かだ。自分の口が動く音だけが存在しているみたいに思う。

赤い閃光が走り、静けさを破るように救急車が国道を走って行くと、闇は一瞬舞台のように彩られたが、暗幕を引くようにすぐさま暗闇に戻った。

食べ終わると何もすることが無くなった。時計を見る。今が何時だろうと意味が無い。この先の計画も何もないのだから。もう黒々とした山並みは、空の闇と溶けて見分けがつかなくなっていた。日中であれば頂に雪の残る山容を見てとれる場所なのであろうが、生憎この場所からでは道路脇にある小さい山に隠れて、闇の中に重なる木々と黒い空しか見えなかった。何か、山の向こうから呼ばれたような気がして、振り向いてみる。気のせいかな、まあ別にどうでもよかったが。

日帰りで戻るだろうと思っていたから、装備は少ない。それでも朝夕は寒いからと、バイクには革ジャンや、ちょっとした備えぐらいは持っていた。バイクには大げさにもスーツケース並みのバックが二つも付いている。中には何時から入れてあるのか忘れたが、常備品としてある程度の物はあった。

今からでも電話すれば今日中にどうにかなるのだろう。そう思いながら時計を見る。しかし半日歩いて疲れた体は、やる気が起きない。体を使うのは嫌だったが、頭は色々考える。朝思い立ってすぐ出てきたから、行き先すら考えてなかった。だから何時に帰ろうとも思わない。今は疲れた体で、ただ想いにふける。

だんだん寒くなってきた。日が落ちてから急に空気がひんやりしてきた。それもそうだろうも

う一本隣の国道に行けば、まだ雪のある標高にまで達する。今眺めている裏側にある山の頂は、まだ白い雪の山だ。ふとまた誰かに呼ばれたような気がしたが、空耳だろうと、気にも留めなかった。

七

この温度、思い出した。まだ十代の頃バイクで走るのが楽しくて仕方が無かった時の事だ。あれは、五月の連休だった。やはりこの辺の国道を走っていた。今とルートは違うけど、ほど近い場所だ。ただひたすら走り、何時の間にか日が暮れていた。あの頃は何処まで行けるかなんて考えても無かったから、日中走って行ける所で野営した。野営と言ってもお粗末なもので、金はバイクにつき込んでいたから、寒さを凌ぐものは革ジャンと厚手のトレーナー、後はエンジンの熱。

今、辺りを包む空気の温度、そして匂い。目の前に浮かぶように蘇る。肌に触れる空気があの夜を想う。

空気の冷やかさに、現実に戻る。とりあえず着れるものは着て、ベンチに体を投げ出す。空を見ると、山間の光の無い空に星が出ていた。綺麗だ、声に出してそう思った。しかし夜は更に冷えるだろう。

物音に気付いて見上げていた視線を戻すと、30mくらい前方の草木の中で、何かが動いた様な気がした。まあ、狸かそんなものだろうと、気にしなかった。

時計を見る。何時だろうと意味が無く、ただ時間が過ぎているのを知る以外に役には立たない。んっ、さっき見た時は何時だっけ。まあ、どうする気も無かったから気にもしなかった。

あまり座り心地の良くないベンチに横になる。携帯を開いて見ても何処へ連絡する訳でもなく、ただボタンを押せば繋がるという安心を確かめただけかもしれなかった。どうしようか、ようやく先の事を考え始めた。朝見た天気予報は、この先しばらく崩れそうに無いと言っていたし、一つずつ解決する方向へ考え始めた。

ガソリンどうするかな。もはや自力で入れに行けるとは思えなかった。まあ、朝になれば誰か通るだろう。その程度の楽天的な考えしか出てこなかった。腕に痛みを感じ、ベンチの上で横になった向きを変える。

「痛っ」

体の体勢を入れ替えたのだが、上になった右腕の方が痛んだ。いや、腕だけじゃなく足も痛みを感じる。変な体勢で体重をかけていたからかと思い、体を起こす。まだちょっとは痛むが、大したことはないようだ。半日も押して歩いたからだ、体にかかった負担を思った。暗闇に煌々と光る自動販売機が眩しい。他に灯りを灯すものは何も無く、後は暗闇に星空が何処までも続いていた。

まあ、今日は仕方無いかと、観念したように一息吐く。寒さに耐えられるように包まってベンチに横になった。疲れと静寂が眠気を誘う。うとうとしていたような寝ていないような。ん、また誰かに呼ばれたような気がする。なんだかアルファベットの頭文字のような。しばらくうとうとして、また眼を閉じたが、今度は明らかに音が聞こえた。音のした方を見ようと体を起こすと、右手右足、右の脇腹に痛みのような違和感を感じた。どうしたのかと思ったが、半日押して歩い

た筋肉痛だろうと思った。

音の大きさからすれば、そう大きなものではないように思われた。せいぜい小動物くらいだろうと思う。ちらりと時計を見る。さっき見たのが何時だったのか思い出せない。今、眺めてる時計は正確に今の時間を刻み続けている。まあいいかと視線を暗闇の方へ向ける。正体不明の暗闇の中に、何故か恐怖を抱かなかった。しばし見ていたけど何の変化も起きなかった。また居心地の良くないベンチで横になる。

それでも屋根の下にいただけでした。ベンチの体に触れていない所へ手をやると、冷えた所が湿っぽい。朝には露となって濡れるのだろうか、自分の体温に包まり目を閉じた。ふと眼を開けると、屋根を支えている柱の先にある何もない闇が歪んでいる。これは夢だろうと思った。いや、夢を見ている本人が夢を見ていると断言できるのか。

空間が歪むなんてことは現実にはありえないから、それに全く不思議な気がしない。目の前にある歪みが普通にある存在のように思っている自分がある。どうなっているんだろう。歪がどうなっていると言う事よりも、ただそれを見ている自分が、何の疑念も抱かずに見ている事に理解できない。と、そこへ一台のバイクが来た。俺のバイクの隣に止めてヘルメットを脱いだ。自動販売機に照らされた人影が、シルエットに映る。髪が長い、女？こんな夜更けに、しかも何をここにこへ？

八

「行くの、戻るの？」

えっと思ったら、目の前に立っていた。何だいきなり、行くのか戻るのかって、不可解に思い顔を見ようとしたが、自動販売機の光が逆光になって顔が見えない。

「今なら戻れるんじゃない」

言葉の音圧が、何かを意味していると思わせるが、何の事だか理解が出来ない。

「何の事だ」

「あのバイクあんたの」

声の質からして二十二~三くらいの女に思われる。質問の内容は意味不明だが、それより目の前にいる女の存在の方が気にかかった。

「そうだ、俺のだ」

「ずいぶん冷えているのね」

冷える？どういう意味だ。夜風に吹かれて金属が冷たいという意味か、それともエンジンが掛かっていないという意味か。

「でも、もう動かないでしょ」

えっ、ガス欠の事を知っているのか。

「どういう意味だ」

「まだしばらくかかるわね、HHIIGG」

「はあ、何の事言っているのか意味わかんねえぞ」

女は俺の言った事には返事はせずに、バイクの方へ歩いて行った。「なんだありゃ」呟いてその後ろ姿を見る。シルエットのように浮かび上がる女の体は、遠目に見てもスタイルがいいと分かった。

こんな夜更けに女一人で、しかもバイクに乗って何をやっているんだ。思いを巡らし眺めてい

ると、またこっちに来た。

「はい」

女に温かい缶コーヒーを手渡された。気温は結構下がっていたから、ありがたく頂いた。

「こんな夜に何してんの」

俺はコーヒーを口にしながら、訊いた。

「ええ、仕事ですから」

さっきまでの態度とは違い、コンビニの店員のような口調で言った。

「仕事？」

答えてはくれなかった。明らかにおかしい。こんな夜更けに通りすがりでもあるまいに。相変わらず顔はシルエットになって見えない。まあ、声と影からして期待させるような感じはしたが、普通じゃない今に、普通にしている自分がいる。それなのに不思議とは思わなかった。

「明日も動かないわ」

どうも話に脈絡が無い。でも俺の事を言っているのは確かだ。

「実は、ガス欠なんだ」

俺はまだどうするか決めてはいなかった。朝が来てから考えようと思っていたから。しかし今この女に言った瞬間、少し期待したかもしれない。

「そっちへは行けないわ」

なんかトンチンカンな事を言ってやがるな、どんな顔をしているのか見ようと立ちあがった。

「ダメ、動いてはいけない」

立ちあがろうとした手に激痛が走った。思わず声に出してまた座りこんだ。なんで痛みの事まで知っているんだと思いながら、シルエットの顔を見上げる。女が体の向きを入れ替えるために体重を移したとき、一瞬顔の半分が照らされた。たぶん相当いい女だ。一瞬だったが為に強く印象に残った。自分の中に、この女への欲望がある事に気付いた。

「何故ここにいるんだ」

「ええ、仕事ですから」

またこれか、何故かこの時だけは明るい女の子の声で言う。何をどう質問していいのかと思ってみても、別に急ぐわけでもなく、今すぐに、この場をどうにかしようとしている訳でもない。ただ、目の前には夜更けに一人、相当いい女がいるって事。

「そっちへは行けないわ」

何を言おうとしているのか、考えた。こいつはお化けや幽霊の類か、それにしても動じない俺はどうなっているんだ。何者であるにせよ、何か訊かずにはいられなかった。

「行くとどうなる」

意味を理解せずに、女の言葉に問いかけた。

「行く気なの」

「いやだから、そうだったらどうなる」

黙ったまま答えてはくれなかった。

「じゃあ、戻ったらどうなる」

「もう時間が無いわ、本当に戻る気なの」

どっちにしても、あまり期待できそうにない答えが返ってきた。

「行くとしたら何処へ行くのかな」

女は黙って国道を指差した。

「ふーん、じゃあ戻るとしたら」

くるっと反対の国道を指差した。

「大変、急変した」

「えっ、何が？」

どうも話が繋がらない。やっぱり夢か、夢なら何をしてもいいんじゃないか。シルエットの胸のラインを目でなぞると、急に欲が抑えられなくなる。そのまま腰を眺めまわし足まで降りる。

「おい」

俺は、体を手繰り寄せようと華奢な腕を掴んだ。女の感触に欲情する。

九

何か鈍い音がして目覚めた。丁度夜明け前で闇が薄れつつある中に、山間の谷が浮かんでいた。結構冷え込んでいるらしく、ベンチの端は夜露で濡れていた。起き上って周りを見る。やっぱり夢か、あり得ない事だと現実を実感する。痛かった腕が何ともない。これも夢だったのかと、ふらふらとバイクの所まで行くと、シートの上には夜露が水玉のように並んでいた。

しかし冷えている。この気温の中じゃ、たとえガソリンがあったとしても走りたくはない。バイクのケースからラジオを取り出す。ベンチに体を放り投げて、ラジオのスイッチを入れた。色々いじっては見るが、山間のこの場所ではどうも電波を拾えない。しばらく頑張ってみたが駄目だった。腹が減った事に気付く、昨日買った残りのパンをかじった。白み明けていくのを見ながら辺りを見渡すと、コーヒーの空き缶が置いてあるのに気付いた。これは？記憶を呼び起こし俺が飲んだものかと首を傾げる。そうだ、女に貰った。昨日の夜の出来事が目覚めるように思い出されていく。夢じゃなかったのか。明らかな物的証拠に記憶を手繰り寄せる。何の話をしてたんだっけ。断片的な記憶は話の内容まで覚えてはいなかった。女の事を思い出そうとしても、顔も思い出せない。とりあえず、何か飲もうと思って空き缶を持って自動販売機へ行く。備え付けられた空き缶入れに空き缶を捨てる。ガランと音がするのを見届けると、もう一つ捨ててあった。これが昨日の女の物なのか、以前から捨ててあった物なのかは分からなかったが、自動販売機のボタンを押しながら、もしかしたら自分で買ったのかもしれないと記憶が曖昧になった。

とにかく今はまだ寒いからと、ベンチに座り、プルタブを引いた。温かい飲み物に気を取り直して空を見上げた。

ラジオが鳴っているのに気づいた。何時の間に鳴っていたのか耳を傾けると、どうやらニュースのようだ。全国のニュースを一通り終えると、ローカルニュースに変わった。《国道xx号線xx付近でタンクローリーの横転事故...》えっ、昨日通って来たところじゃないか。どうやら引き返したくても通行止めらしい。地図を広げて、道路を確認する。やっぱり20kmはあるな。どう見積もっても、そのくらい行かなければスタンドはなさそうだ。また押すのかと思ったけど、通行止めと言う事は、待っていても誰も来ないだろうと、行く事に決めた。昨日も昼からだけど結構来れたしな。今日は朝からだから大丈夫だろうと思って、出発の準備をする。

さあ、行くかと思って、スタンドを払った時に気付いた。横にもう一台、切り返した跡がある。砂地だったから、タイヤの跡が残っていた。あの女か、また記憶が蘇る。夢だったのか現実だったのかよく分からないまま国道に出た。もう状況がどうであろうが、押して歩こうがどうでもよく、このスタイルで進む、この為に行く、それにも似た気持ちで歩き始めた。

朝の空気はひんやりと冷たいが、十分も歩くと体は熱くなる。昨日の疲れが足に残るが、それでも一歩また一歩と進む。まだキャンプ場が見えるくらいなのに、体は休みを要求する。息が切れ始めると、昨日より酷いかもしれない辛いばかりが強く思われ始める。

力の限り押して歩く。何のために出掛けてきたのか分からなくなり、ただ渾身の力を込めて押して歩く。もはや重いだけの荷物にしか過ぎなかった。機械ではなく鉄の塊だった。

〈そりゃもう駄目だ。スクラップだ〉

何処からか声がしたような気がして、見回してみるが気のせいのようなのだ。こんな所に誰がいる訳もないと、また歩く。

タイヤが付いているおかげで動かすことはできるが、そのせいでこんな目に遭っている。下らない事ばかり考えては消えていく。なんで押しているのか、いまだに答えは見つからない。答えが見つかった時に、解放されるような気がして、ただ進む。登り坂にさしかかると、昨日の地獄がまたやってくる。

押し歩く、息が切れる、休むこの三工程を繰り返す。ただひたすら繰り返す。もう何回休んだのか分からない。足も痛くなってきた。足の痛みにブーツを脱ぐと、親指の付け根に水膨れができていた。何度も同じ所に力が入り皮膚が破れていた。

へたり込んでいると、夢の事が思い出された。夢？そう、きっと夢に違いない。今のあまりに辛い現実に、昨日の夜の事が現実には思えなかったから。

十

地図を広げて今いる場所を探す。あれ、どうして？今、自分がいる場所が分からない。さっきまで後何kmと思っていたのに、何処に行くつもりで今何処にいるのか、地図の上で探す事が出来ない。頭は混乱した。どう言う事だ。時計を見ると、現在時間は正確に刻まれている。でも、何時に何処から来たのか記憶が曖昧になる。今、何時と思った時間が何時だったのか分からない

待て、落ち着け。思うよりも心には乱れはなく、冷静だった。携帯を出して開いてみると、アンテナのマークは出ている。電話しようとしたが何処へ掛けていいのか分からない。アドレス帳を見ても、どこの誰の名前が書かれてあるのか思い出せない。分からぬまま適当に発信する。鳴る呼び出し音が回数を重ねるごとに期待が高まっていく。

「はい」

若い女の声だ。聞き覚えのあるような、無いような。

「誰？」

「そっちこそ誰よ」

言われて返事に困る。自分の名前が分からない。

「ああ、昨日のガス欠さん」

その声に思い出した。

「昨日の夜会った女(ひと)」

「何処まで行ったの」

「いやそれが、何処だか分からないんだ」

「ふーん、困ってるの」

「ああ」

「助けて欲しい」

「できれば」

「でも、断ったでしょ」

えっ、何の話だ。辻褄の分からない話に困ったが、何とかしたいと思った。

「どうしたらいいか、教えてくれないか」

「電気ショックですね」

それは俺に言ったというより、誰かと話している返事のように聞こえた。

「何、電気...」

そこで電話は切れた。全く意味不明だ。今ここにいる事も、あの女の事も、目の前に広げられた地図が、いったい何処の地図なのか、全く分からなかった。行く当ても分からなくなり、へたり込んだまま、しばらくぼーっとしていた。それなのに気持ちは平常心で全く焦りも無かった。

十一

時計を見ても、その時は何時だと思うが、その前に見たのが何時だったのか記憶にない。進んではいるのだろうけど、時間の流れが分からなくなった。何処見る視線でも無く、山間の道を眺める。

遠いがバイクの音がする。ここへ来るのだろうか。近づくにつれて、それがハーレーだと分かった。

もうかなり近い。音のする方をじっと見る。音圧が、道路から伝わり姿が見えた。スポーツスターかと、心で呟くと目の前で止まった。座り込む位置から崇めるように見上げると、陽光を後光のように浴びていて、その姿に目が眩んだ。全身革のジャケットに身を包み、蹴り出してスタンドを立てると、ヘルメットを脱いで髪を振りほどく。ああ、昨日の女。とっさにそう思った。俺の目の前で、太陽を背に見下ろしている。眩しくて顔は分からないが、間違いなく昨日の女だ。

「無事なようね」

「御覧の通りだ」

俺はへたり込んだまま、力無さ気に答えた。

「もうスクラップじゃない」

また始まったか、思いながら女の方を見る。

「大丈夫、そうそう大丈夫」

またトンチンカンな事を言ってやがる。より一層、女の後ろの太陽が明るくなった。

「聞こえる」

その言葉にうっすらと目を開けると、眩しい光を背に女が覗き込んでいた。

「大丈夫ですか、分かりますか」

ようやく開いた目でよく見ると、女性の看護師が俺を覗き込んでいた。

「ここは」

視界にもう一人女が目に入った。

「ああ、姉貴」

「もう、死んだかと思ったじゃない」

心配そうな顔をして、覗きこむ姉と看護師が目の前にいた。

「俺、どうしたんだっけ」

話を聞けば、国道でタンクローリーが横転した事故に巻き込まれていたらしい。三日間昏睡状態が続いていたと言う。体は、右側を四ヶ所骨折、腰の打撲、頭部に強い衝撃と、十五針の傷。よく生きていたと、姉貴は涙をこぼした。

「俺のバイク、どうなった」

「スクラップに決まっているでしょ」

「そうかスクラップか」

「ちょっと、脈見せてください」

シーツを捲り、俺の左手を看護師が掴んだ。この手は、と思いかけたが、ここは現実だ。看護師の顔をまじまじと見て、あの夜の事を思う。ただ目の前で自分の仕事をきっちりこなしている看護師を見て思った。

「看護師さん、大変ですね」

「ええ、仕事ですから」

その声にはっとした。

「看護師さん、ハレーのXLH883に乗っていませんか」

「ええ、どうして知っているんですか」

「いや、そんな気がしたから」

「あんた、そんな体でナンパしたって駄目でしょうが」

姉貴の害の無い明るい声に流された。やっぱりあの夜は本当だったんじゃないかと、俺の体を揺さぶる触れた手に思った。

〈了〉